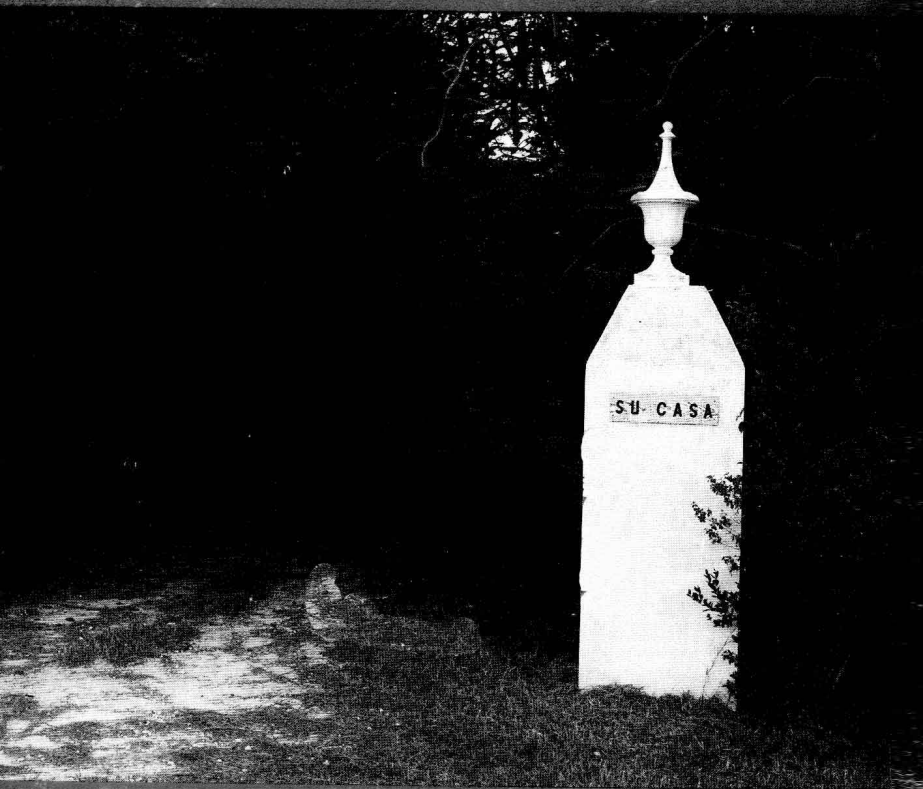


推理小説代表作選集

The mystery annual of Japan 198





1987=推理小説年鑑 推理小説代表作選集

日本推理作家協会編 講談社

1987年版 推理小説年鑑
推理小説代表作選集 定価1700円

昭和62年 5 月28日 第 1 刷発行

編 者 日本推理作家協会
発行者 野 間 惟 道
発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号 112
電話 東京(945)1111

印刷所 豊国印刷株式会社
製本所 株式会社黒岩大光堂

© 日本推理作家協会 1987 Printed in Japan
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にておとりかえいたします。

ISBN4-06-114529-0 (0) (文2)

1987年版 推理小説年鑑

推理小説代表作選集〈目次〉

序・	中島河太郎	5
いの一番大吉・	都筑道夫	9
遠眼鏡の中の女・	中津文彦	39
稚い証人・	夏樹静子	67
禁煙の日・	佐野 洋	101
折から凍る二月の・	仁木悦子	121
狐の香典・	泡坂妻夫	147
仰角の写真・	日下圭介	169

化石の街・・・・・・・・・・	島田 莊 司	207
赤い証言・・・・・・・・・・	小杉 健 治	245
大垣行345Mの殺意・・・・・・・・	西村京太郎	271
スウィッチ・ブレード・・・・・・・・	大沢 在 昌	307
クリヴィツキー症候群・・・・・・・・	逢 坂 剛	343
おもいで・ララバイ・・・・・・・・	皆 川 博 子	385
刑事課長の災難・・・・・・・・・・	三 好 徹	399
狼女は眠れない・・・・・・・・・・	山 崎 洋 子	421

推理小説・一九八六・二上洋一 450

SF界一九八六年・風見潤 455

受賞リスト 460

デザイン 細谷 巖

写真 真木津 康夫

序

日本推理作家協会理事長

中島河太郎

日本推理作家協会の前身、探偵作家クラブが設立されたのは、昭和二十二年六月だから、今年で四十年を経たことになる。

設立当初から引き続いて行われている事業として、協会賞（当初はクラブ賞）の授賞と、「推理小説代表作選集」の刊行がある。

この「選集」の内題に「推理小説年鑑」と添えてあるが、協会の正式名称はこのほうを採っている。

前年度の優秀短篇を収録して、読者の便宜を計ろうとする試みは、設立以来の念願であって、年度によって二冊刊行したことがあるので、本年度は第四十七冊に当たっている。

推理小説の長篇は、近年文庫化が多く、入手し易くなったが、毎年、六百篇を越す短篇を一々雑誌で渉猟することも煩雑であり、また逸脱を恐れて、せめて代表作だけでも保存しようとする企てである。幸い、読者の支持を得て四十年も継続できたことは有難い。

本年版の編集に際して、郷原宏、権田萬治、瀬戸川猛資、多田兼成、中村利夫、林邦

夫、山前譲の七氏に委嘱して、年間の秀作選出にあたつて戴いた。収録された十五篇は、老巧、新鋭が妍を競つて、前年度の多彩な傾向を反映している。

さらに推理小説界とSF界の前年度の動向と展望を、二上洋一氏、風見潤氏にお願いした。夥しい作品に目を通していただいた労に謝意を表したい。

一九六七年版からは「ミステリー傑作選」と題して、講談社文庫に収録されている。その第十七巻「とおつておきの殺人」は八二年版で、四月に刊行されたことを付記しておく。

昭和六十二年四月

1987年版推理小說年鑑

推理小說代表作選集

いの一番大吉

都筑道夫

「西連寺さいれんじさんは、おみくじを引いたことが、おありですか」
仁王門のところで、正木藤江は立ちどまると、小声で聞いた。その目は、門のわきの立木に、むけられている。木の枝には、細く畳んだおみくじが、無数に結びつけられて、白い花房が垂れているようだった。

「近ごろでは、ありませんね」

おれが答えると、藤江は肩をすくめて、

「あたしもです。あのひとと結婚する前に、浅草の観音さまで、おみくじを引いたのが、最後でした」

「若いアベックが、おみくじを引いているってのは、よく見かけるけど、悪くないな」

「黒い筒をふって、出てきた竹べらを見たら、『いノ巻』と書いてありました。お坊さんのところへ持っていったら、おみくじを引出しから出してくれて、それが『いの一番大吉』だったんです」

「なるほど、『いの一番』なら、『大吉』でしょうね。それにしても、すごい」

「いいことが、いっぱい書いてありました」

阿吽あうんの仁王をおさめた門は、青みを帯びた褐色に古びていて、木目が白く浮いていた。金剛力士の像も古く、口をひらいた阿吽の仁王は、片腕が欠けおちている。だが、左右ともに古怪な、いい顔をしていた。

「正木もよろこんでいたけど、あたし、『おみくじはもう、二度と引かない』っていったんです。『いの一番大吉』よりいいのは、ないわけでしょう？」

「そう思います……」

「あとは悪いのが出るばかりだから、もう引かないことにしたんです。おみくじを、本気にしていたわけじゃあ、ないんですけどね。おまいりに行くと、なんとなく引いていたんです。でも、『いの一番』なんて、一度も出たこと、ありませんでした」

おれたちは、仁王門をくぐって、ゆるやかな石段の坂道を、のぼりはじめていた。左右の木立ちは常緑樹にまじって、冬紅葉を残している。だれかの句碑が、立っているそばに、蔵柑子のしげみがあって、まっ赤な実を目立たせていた。

「ひらがなと数字を組みあわせて、籤をつくっているとこ
ろなら、どこでも『いの一番』は、あるはずだが……」

と、おれは肩をすくめて、

「そういえば、ぼくも引いたことは、ありませんね」

「ですから、引くのをやめたんです。あのころが、いちば

んよかったのかも知れませんが、あたしの運勢は」

正木藤江は、蒸発した人妻だった。亭主の依頼で探しはじめ、わずか三日で、静岡県の磐田市にるのが、見つかった。わりあい手がかりがあつて、つまり、探しだすより、説得してつれもどすことのほうが、眼目の仕事だった。藤江は男といつしよに、市のはずれのアパートに暮していた。その男の留守をねらつて、おれがたずねると、「わかりました。お話はうかがいます。ですけど、ここでは邪魔が入ると、いけません。おもてへ出しましょう」

寿松寺という古い寺が、近くにあって、藤江はそこに、おれを案内したのだった。

「ここには、有名な閻魔堂があつて、縁日にはこの参道の両がわに、ずっと露店が出るんです——とても、にぎやからしいわ。こちへ来たのは、お盆すぎだったから、お正月の十六日を、楽しみにしていたんだけど、だめそうね。運がなくなっているのよ、やっばり」

と、タートル・ネック・スウェーターの肩を、藤江はすくめた。

「じゃあ、いっしょに東京へ、帰ってくれますか」

おれが聞くと、疲れたような顔が、こちをむいて、

「いやだ、といつても、つれて行くんでしょ？」

「力ずくで、ひっぱつて行つたりは、しませんよ。説得にきたんですから」

藤江は三十五歳ということだが、横顔の皮膚は乾いて、

老けて見えた。亭主の正木靖から、わたされた写真には、目鼻立ちの明るいチャーミングな女性が、レンズに笑いかけていたけれど、いま並んであるいている女は、頬がこけて、目つきが暗い。夫から逃げている気苦勞で、やつれたのだろうか。

「正木はどうして、自分で説得にこないのかしら」

「見つけたことを、まだ知らせていないんです。ご主人は東京で、話しあいをしたいんです」

石段坂は右へカーヴしながら、どこまでもつづいていった。木立ちのなかで、鳥の声がしている。なんの鳥か、おれにはわからない。中門というのか、さっきの仁王門よりは、小さい門があつて、おもしろいかたちをしていた。櫓づくりなのだが、その二階の部分は、下が空間のところだけなのだ。長方形の積木を二個、あいだをあけてならべた上に、四角い積木をおいたみたいで、櫓のなかには、太鼓がさがっている。

「時の鐘のかわりに、あの太鼓をたたくんですか」

門をくぐりながら、おれが聞くと、藤江は首をかしげて、

「さあ、どうでしょう。アパートまでは、聞えませんが……」

太鼓はまだ新しいが、門も櫓も古ぼけて、屋根は鳩の糞で、粉をふいたようだ。

「離婚するって、いっていませんでしたか、正木は」

とつぜん、藤江が小声でいった。とつぜん石段も短く、急勾配になった。顔をそらしても、石段と空しか見えない。空は冷たく晴れて、ちぎれ雲がまばらに、かすれたように浮かんでいる。

「離婚ですか。そんな話は、聞きませんでしたよ。あなたは、離婚したいわけ？」

「わかりません。西連寺さんがいま、離婚届をお持ちなら、サインするかも知れないけど……でも、正木はそのために、あたしを探したんじゃないのかしら。あたしが蒸発したままじゃあ、離婚できないでしょう？」

「しようと思えば、できますよ。いろいろ、手間はかかりますが……とにかく、いちど帰って、ご主人と話してあげてください。いま一緒にいるひとと、なにか面倒があるんなら、ぼくが話をつけますよ」

急な石段がおわると、正面に木造の古い本堂が、青銅瓦の屋根を、そらしていた。右手にある白壁の堂は、閻魔堂にちがいない。左手は舞台のようになっていて、おれたちがのぼってきた石段坂や、深い木立ちが、見おろせるのだから。

「黙って帰ったって、かまいません。身のまわりのものしか、荷物はないんです。バッグひとつで、持ちだせるくらい」

ひとことのようにいいながら、藤江は本堂の階段をのぼった。金網をはった格子戸がしまっていて、堂のなかは、

よく見えない。廻廊には、絵馬がずらりと、かけならべてあった。絵馬といっても、大きなものばかりだ。なかにひとときわ、横長の大きなものがある。日清戦争戦勝祈願、と金粉の文字がかすれていて、肋骨服の日本兵が大勢、斜面を駆けのぼっているところが、極彩色でえがいてあった。斜面には城があつて、城門から、清国兵が走りでている。城は日本ふうの石垣で、清国兵は弁髪に、青竜刀をふりかざしていた。日本の戦国時代と、『三国志』の世界が、赤の目立つ明治の錦絵のなかで、ごっちゃになっている。そのいい加減なところが、おもしろい。額のすみには、

国晴筆名古屋本町二丁目金城堂謹製

と、書いてあつて、絵はなかなかうまい。おれが口をあいて、その大絵馬を見あげていると、藤江は微笑しながら、

「このお寺、江戸時代からある古いものなのに、絵馬は明治ごろからしか、ないんです」

「ここには、よく来るんですか」

「ときどき……ひとりで、考えてみたいときに、ここへ来るんです。けっきょく、なんにも考えられないで、ぼんやりしているだけなんだけど、落着くから……」

「静かですからね」

墓地に通じるらしい道のわきに、櫛しきみや花を売る店があつ

て、老婆がひとり、すわっている。だが、蠟人形のよう
に、動かない。藤江は舞台に出ていって、

「ここから飛びおりたら、手間がはぶけるだろう、と思っ
たりもします」

「お坊さんにすぐ、拜んでもらえるからですか。そうはい
きません。自殺死体が発見されれば、すぐ病院にはこぼれ
て、解剖ですよ。嚇かすわけじゃあ、ありませんが……」

「どうせ、だめなの」

と、藤江は下を指さした。手すりから、のぞいてみる
と、舞台は断崖に、つきだしているわけではなかった。崖
はゆるやかで、さしかわした木の枝のあいだに、石段坂が
うねっている。藤江はくちびるを歪めて、

「枝にひっかかって、怪我をするだけじゃないかしら。で
も、見晴しはいいでしょう？」

樹木のむこうに、畑と道と家が、ミニチュア・セットの
ように見えた。道には車が、さかんに往来している。

「死ぬことを、考えたりするんですか」

「本気で考えるわけじゃ、ありません。西連寺さんはあり
ませんか、生きていても、死んでも、大して変りはないん
じゃないかって、考えることが」

「ここでの暮し、つらいんですか」

「さあ……『つらい』の反対は、『楽しい』のはずね。つ
らくもないけど、楽しくもないわ。おとなになってから
を、思い出してみると、ほんとうに楽しかったことは、な

かったみたい」

と、藤江は首をかしげて、

「あたし、ぜいたくなのか、それとも、甘ったれているの
かしら。西連寺さん、あたしが東京に帰ったら、正木はど
うするつもりなんでしょう」

「ぼくの仕事は、あなたを探して、つれもどすことです。
あとのことは、わかりません。ご主人は暴力を、ふるうよ
うなひとですか」

「殴られたことは、一度もありません」

「だったら、ざっくばらんに、家出をしたわけを、話せば
いいでしょう」

「そうね。いまの男は毎晩、三回してくれるから、といっ
てやろうかしら。セックスは、大事ですものね」

声だけで笑って、遠くの道路を走る車を、藤江は目で追
っていた。

「大事なだけに、いわれたほうは、こたえるでしょう」

おれがなにげなくいうと、眉をひそめた顔を、藤江はこ
ちらにむけて、

「そんなに、こたえる？」

「もうやめましょう。ぼくは私立探偵で、アドヴァイザー
じゃない。とにかく、いっしょに東京へ、帰ってください
い」

「帰ります。ちょっと、うちへ寄ってから。あのアパー
ト、うちといえるかどうか、わかりませんわね。東京のう

ちも、あたしにはもう、うちじゃなくなっちゃったし……なんにも、なくなっちゃったんですね、あたしには」
だんだん小さくなる声で、藤江はいいながら、黒いスウェーターの背をむけて、廻廊のほうに戻っていった。

2

「おかしいな。あかない」

ドアのノブをまわしながら、藤江は首をかしげた。アパートの一階のはしの部屋で、わきに二階へあがる階段があった。一階も、二階も、廊下は吹きぬけで、空地とむかいあっている。空地は板がこいがしてあって、いずれマンションでも、建つのだろう。国道からは、だいぶ離れていて、静かだった。

「錠があいていたんじゃ、ありませんか」

おれがいうと、藤江は苦笑して、錠にまた鍵をさしこみながら、

「出るとき、鍵はかけたはずだけど……ほんとうだ。やっぱり、動揺していたのかしら、あたし」

ドアはひらいて、藤江はなかに入った。寿松寺へでかけたとき、藤江がドアに鍵をかけたかどうか、おれもおぼえていない。室内にあかりがついて、そのとたん、激しく息をのむ気配がした。靴をぬいで、おれが入っていくと、小さなキッチン奥の六畳に、男が倒れている。座敷のまん

なかに、炬燵がすえてあって、その上で、輪がたの蛍光灯の紐スイッチが、ゆれていた。男は炬燵の手前に、うつぶせになっている。汚れた鉄の灰皿が、そばに投げだしてあって、吸殻がちらばっていた。わきの簞笥に、よりかかるようにして、藤江がふるえている。

「これが、金田さん？」

金田というのが、藤江といっしょに、逃げた男の名前だった。畳に膝をつきながら、おれが聞くと、藤江は小さきさみに首をふって、

「いいえ。金田はこんな服……」

いいかけて、また息をのんだ。おれも気になることがあって、男の肩に手をかけた。顔が見えると、糸の切れたあやつり人形のように、藤江はすわりこんで、

「どうして……どうして……」

こんなことが、といたかったのだろう。いわれても、返事はできない。おれも、あつげにとられていたからだ。死体になっているのは、依頼人だった。正木靖、三十九歳。いまごろは、東京の九段下のビルの事務所、利息の計算でもしているはずの男だった。金融業者で、以前にもいちど、おれを雇ったことがある。集金を持ちにげた事務員を、さがす仕事だった。

「し、死んでいるのね、正木は」

かすれた声で、藤江がいった。おれはうなずいて、「医者を呼んでも、もうどうしようもないですね。これで